

伯爵家の秋

作者：グロ

第 1 章 帰還の日

車輪が砂利を踏んだ。

一度。また一度。規則正しい振動が膝を伝う。ジュリアンは窓枠に肘を預け、目を細めた。学院の寮では、この匂いがしない——日中、陽を食った土が、夕方になってようやく怠惰に吐き出す匂い。その怠さが、うれしかった。自分も休暇になれば、あの土に似てくることを、彼は知らないふりでいた。

『家が近い。』

思考は短い。懐かしい、というより、鼻先が先に知る種類の帰還だった。半年。長くて一年。忘れるには短く、恋しくするには曖昧な時間。それなのに路傍の銀杏はすでに黄色へ傾き、車輪が踏むたび、乾いた葉の碎ける音が膝まで上がってきた。寮の石廊では一度も聞いたことのない音だ。その碎けひとつが、「休暇」という言葉より先に、体へ入った。

御者が短く気合を入れると、馬が速度を落とす。森が開いて石垣が現れた。庭木のあいだで、葉が一枚、光を受けたまま、しばらく落ちるのを先延ばしにしていた。ジュリアンは上体を窓へ傾けた。尖塔。訓練場の砂。それから玄関の階段前に、シルエットがひとつ。肩の線だけでアルフレッドだと分かった。長く見てきた人間の輪郭は、遠くからでも、先に名を言う。

心臓が半拍、速くなった。緊張と呼ぶには軽く、期待と呼ぶには淡い速度だった。彼はネクタイの結びを指でいじった。学院で毎日していた癖が、いまはうなじを沈めるほうへ向きを変えて働いた。

馬車が止まると、振動が膝から抜け、代わりに足裏へ重みが乗った。ここが到着だと、体が先に知った。

正門が開くとき、木の摩擦音が長く尾を引いた。

「若様！ お帰りなさいませ。」

アルフレッドが腰を折る。誇張のない、執事長らしい喜びだった。ジュリアンが馬車から降りると、砂利が靴底で小さく鳴った。半年前もあの場所で、あの角度に折れていた人が、半年後も目盛りひとつ狂わず同じ姿勢。人がこう正確でいられることが、いまさらながら心強かった。

「アルフレッド。達者でしたか。」

「おかげさまで。学期中のお手紙、確かに拝受しております。荷物は部屋へ上げておきます。」

使用人たちが荷物を下ろすあいだに玄関ホールの扉が開き、蠟と木材の匂いが外へ溢れた。寮の廊下の冷たい石の匂いとは種類が違う。ジュリアンはその匂いを一度、深く吸ってから、口角が勝手に上がるのを知った。

「ご主人様は応接室におられます。まずご挨拶を。」

「そうします。」

当然の順番だ。急ぐことも、避けることもない。階段を上がるあいだ、窓の外で葉の落ちる音が薄く途切れ、また続いた。その拍子が変わるたび、馬車の振動が体から抜け、代わりに屋敷のリズムが坐った。

応接室の扉は重く開いた。

午後の陽が窓辺へ斜めに入っている。アリスターはその光の中に坐り、杯を持ったまま、書類を脇へ押しやったところだった。気怠そうに見えて、扉の音には正確に反応した。目を上げて息子を見る視線に、刃はない。確認する目だった。

「ただいま戻りました、父上。」

「おお、来たか。」

杯が軽く揺れる。退屈な午後を過ごしていた人間が、馴染みの顔を確認する程度の重さ。ジュリアンにはその緩さが楽だった。棘のある尋問めいたものはなかった。なくていい日だった。

「学期は無事に済んだか。」

「はい。無難に済みました。」

「うむ、よくやった。」

アリスターは欠伸を飲み込むように手の甲で口元を隠し、それから手を振った。

「坐れ……いや、先に洗ってこい。アルフレッドが晩の席を少し整えたそうだ。はしゃぎすぎだ。」

扉の外から、アルフレッドの声がすぐ受けた。

「はしゃぎではございません。礼儀でございます、ご主人様。」

ジュリアンが笑う。アリスターも肩をすくめて、笑ったふりをした。父子のあいだの古いリズムだ。緊張ではなく、屋敷がいつものように回っている証拠に近かった。

「とにかく、今日は楽に食え。明日のことは明日考えろ。」

「はい。」

「顔を見て、生きておると分かった。行け。」

短い再会だった。長い言葉は要らない。ジュリアンは腰を折って退いた。廊下へ出ると葡萄酒の香りが抜け、蠟の匂いがその場を埋めた。

陽が傾くころ、食堂に灯が入った。

宴と呼ぶには素朴で、いつもの食事にしては手が入った席。長いテーブルの中央でスープ皿が湯気を上げている。窓の外の庭は、橙から紫へ移る途中だった。

アリスターが上座に、ジュリアンがその向かい。アルフレッドが葡萄酒を注ぎながら言った。

「若様の休暇を迎え、席だけ簡素に整えております。」

「ありがとう。」

スープを下ろしたのはビビアンだった。前垂れを締めたまま、皿がテーブルに触れる音まで端正にする手。

「学院の食事、いまいちでしたでしょう？　今日は昔お好きだったのに合わせましたわ。」

「やっぱり、家ですね。」

「ほほ。それなら二杯は責任ですよ。」

バターと野菜の混ざった湯気が顔を撫でた。匙を入れると、ビビアンは満足げに一步退く。その温みひとつで、歓迎の言葉はすでに済んでいた。

ルナが杯を移して水滴を落とした。耳を赤くして急ぎ拭きながら、

「あ、また……！ 申し訳ありません、若様。」

「いいよ。ルナらしい。」

「そうおっしゃられると、余計……。」

言葉が絡まって、笑いが出た。クロエが肩の後ろから静かに布を渡し、ルナの背を一度叩く。口のないチームワーク。以前からよく見ていた場面だった。

クロエはジュリアンの傍へ来て、パンを温めて上げた。視線が短く触れる。挨拶より短く、専属の礼法よりは一呼吸、長い。

「お手紙は届いておりましたわ。屋敷のほう、大事なく回っておりました。」

「頼む。」

「ふふ。もちろんです。」

特別な言葉はない。それでも専属メイドの仕えがすでに定位置へ戻っているだけで、食卓の中心が静かに定まった。

肉が上がり、杯が当たる。アリスターが退屈そうに訊いた。鋭さはなく、晩を埋める口調で。

「ベアトリスは。」

「お手紙では、帝都の任務が延びるかもしれないとのことでした。」アルフレッドが杯を立てて答える。

「セレナは。」

「研究室のほうは……まだ、と。」

「ふうん。家が静かで悪いことはない。家庭教師だけ、明後日あたりに来るそう
だ。お前の勉強はその人が勝手にやるだろう。」

父は欠伸を飲み込みながら杯を傾けた。面倒なことを他人へ渡す態度。ジュ
リアンにはその態度が不快ではなかった。上座の肩があのように解けているかぎ
り、この屋敷は今日、急ぐことを作らないだろう。

食卓の会話は途切れず、しかし急がない。ビビアンが菓子を進め、ルナが皿
を割りかけたところをクロエに掴まれ、アルフレッドがアリスターの空いた杯を
そっと下げると、父が目を細めてから手を振った。そのすべての騒音と失敗が重
なって、ジュリアンの舌尖には結局、「家」の味ひとつが残った。

食事が終わるころ、アリスターが言った。

「今日はこれでいい。小僧も疲れているだろう。」

「はい。」

「部屋へ入って休め。明日会う。」

歓迎の終わりにも叱責はない。長い説教もない。空いた皿と、冷めていくス
ープの湯気だけが残ったとき、ようやく到着が終わった気がした。

四階へ上がる階段で、ジュリアンは欄干を一度撫でた。指先に残ったのはス
ープの温みではなく、一日分の安堵だった。部屋へ入り、窓辺に立って、庭へ闇
が降りてくるのをしばらく見た。塀のほうの落ち葉の山が、風の一筋に小さく身
じろいだ。

『今日は、ここまでだ。』

庭の噴水の水音が、ごく遠くに聞こえた。学院では一度も聞かなかった音。ベッドに背を預けると、旅の疲れが遅れて体を押した。肩の凝り。馬車の振動の名残。ネクタイを解いて知った首の涼しさ。布団を引き寄せると、秋の夜の空気が足首だけをそっと撫でて退いた。

眠りが完全に降りる直前、扉の下の際間で光が一度途切れ、また続いた。足音はない。廊下を過ぎる誰かの影だったのだろう。この時刻にまだ眠っていない人間が屋敷に何人いるか、ジュリアンは数えかけてやめた。半年ぶりに戻った家だから、見知らぬ感じがするのだと思いながらも、耳は扉のほうへ、少しだけ開いていた。

秋の最初の晩が扉の際間から抜けていき、部屋は息の音だけを残した。

(第 1 章 終)

第2章 初夜 クロエ

眠りは、思ったより浅かった。

ジュリアンが目を開けたとき、部屋は完全な闇ではなかった。カーテンのあいだから月明かりが細く入り、ベッドの縁を淡く濡らしている。天井の木目が月光のせいで波のように見えたり、瞬きすればただの天井に戻ったりした。彼は布団の外へ手だけ出し、空気の温度を測った。秋の夜は、石の家を深夜にいつそう早く冷やす。手の甲が冷えると、ようやく下腹の重みがよりはっきりした。

『……便所だ。』

単純な尿意。歓迎のスープと葡萄酒、笑いながら行き来した皿、緩い父の杯。そのすべての温みが体内に残して作った、当然の合図。説明の要らない目覚めだった。下腹が先に起こした夜。ジュリアンは布団を横へはね、足を床へ置いた。木の冷気が足裏の中央を刺すように上がる。短く息を吐いて、扉を開けた。

四階の廊下は静かだった。

静かすぎて、自分の息がことさら大きく聞こえる。どこかで蟋蟀が鳴いたが、距離は遠い。壁は月光をほとんど含まず、代わりに窓側の端だけで床が白く光った。ジュリアンは取っ手を慎重に置き、欄干を掴んだ。掌に蠟の薄い滑りが残る。足が段を探すたび、木が低く鳴った。幼いころから聞いてきた音。速く降り

れば音が大きくなり、ゆっくり降りれば息のように減る。体はその規則を忘れたことがなかった。

三階の踊り場に足を乗せたとき、空気が少し違った。昼の石鹸の香りがごく薄く残っている。メイド部屋と執事部屋のほう、使用人たちが休む階の匂いだ。

そしてその階で、ジュリアンは知らず歩みを遅くした。

最初は何だか分からなかった。温みではない。匂いでもない。空間が何かを含んでいる感じ。欄干に手を置き、耳を澄ませた。学院で夜の気配を測っていた癖が、不必要に蘇ったのかもしれない。心臓が喉のほうへ少し上がった。彼は欄干の角を親指で擦り、息を整えた。

それから、聞こえた。

扉が完全に閉まりきっていない隙間から漏れる、粗い息。

肌が触れるような、短く湿った摩擦。

男の喘ぎが力を失い、鼾へ変わる音。

ジュリアンは眉間を寄せた。音のするほうは執事部屋、アルフレッドとビビアン部屋だった。夫婦の夜。知っておくべきことであり、わざわざ知る必要のないことでもあった。彼は視線を外し、階段をさらに降りようとした。一階の便所まではまだ遠い。礼儀の問題だ。この家に住む人間なら、こういう音を知らないふりする法も学ばねばならない。

ところが鼾が安定したあとも、音は終わらなかった。

ひとり残された女の息。

こらえては漏れる吐息。

自らをなだめるような、細く濡れたリズム。

ジュリアンの耳が熱くなった。足首が固まる。頭の中では「聞いてはいけない」という文がはっきりしているのに、体はその文より遅かった。ズボンの布が内側から不便に引っ張られる感覚が上がってくる。彼は欄干を強く握った。指の節が白くなるほど。

昼の食卓が目の前に重なった。

スープの湯気。ビビ안의笑い。「二杯は責任ですよ。」

その温みと、この夜の音が同じ人間から出ていることだけが、胸のどこかを不便に締めた。欲望か、当惑か、罪悪か、名を付ける前に呼吸だけが速くなった。ジュリアンは目を閉じた。閉じて音は残る。むしろ閉じると音が大きく入ってきた。扉隙間から漏れる吐息が一度高くなり、布団の中へ自ら埋める音へ変わる。アルフレッドの鼾はその上で平然としている。ひとり残る女の夜を数えている自覚が、ズボンの中の熱といっしょに顔を焙った。欄干の蠟が汗でより滑った。

「ふう……若様？」

背中の方から、香水が先に来た。

甘く、しかし軽い香り。昼の仕えではほとんど漂わなかった、クロエだけの夜の匂い。ジュリアンの肩がびくりと動く。振り返る前に、すでに見られたという感覚が背を伝って上がった。彼はゆっくり後ろを見た。

闇の中で白い前垂れが淡く浮かんでいる。深夜の巡回で着る薄い制服だった。クロエは廊下の角、月明かりがやっと届く場所に立っていた。髪の毛の輪郭。唇の

線。笑っている。大きくではなく、目を細めるほうの笑い。ジュリアンはその笑いを見ても、すぐ言葉が続けられなかった。口の中がすっかり乾いていた。

「こんな夜にここにいらっしゃると……変な誤解、買いますわ。」

声は低い。叱る調子ではない。面白がっている気配に近い。クロエはゆっくり近づいた。足音がほとんどない。馴染みの家の床を、馴染みの踏み方で踏んでいる。彼女はジュリアンが耳を澄ませていたほうを、そっと見た。扉隙間の意味を読むのに、時間は長くかからなかった顔だった。

「ああ。」

短い感嘆。嘲りではない。分かった、という印に近い。それでもジュリアンの耳朵が熱を持った。

「メイド長の夜を……盗み聞きしていらしたんですね。」

「違う。俺はただ――」

「お手洗い。」

クロエが代わりに言った。あまりに自然で、言い訳のほうがかえって貧相になった。ジュリアンは口を閉じる。クロエはその沈黙を急かさない。代わりに一歩近づき、彼の袖先を指で軽く摘んだ。力を入れない接触。しかし確かな接触。布の向こうへ指の温みが滲む。

「嘘はつかなくていいんです。私、若様の専属ですから。」

彼女はしばらく言葉を止め、ジュリアンの顔を近い距離で見た。息が届くか届かないかの間隔ではなかった。それでも昼の礼法よりは一掌、近い。

「さあ。お手洗いへ参りましょう。ここでこれ以上立っていては……困りますわ。」

ジュリアンは袖を抜くべきか迷った。抜けば終わることだ。従えば別のことが始まる。頭の中では計算が回った。父。発覚。明日の昼。ところが計算より先に、体が応じていた。彼は結局、袖を抜かなかった。

クロエが先に歩く。

ジュリアンは一拍遅れてその後ろに従った。

三階の廊下を外れ、階段をさらに降りる。二階の応接室の扉は固く閉まり、父の気配はない。一階に着くと廊下の蟋蟀の音が遠ざかり、便所の扉の冷たい金属が指先に触れた。

扉が閉まった。

掛け金の掛かる音が、思ったより大きかった。金属が溝へ入る短い摩擦が狭い壁に一度鳴り、すぐ収まった。その瞬間、外の屋敷がごく遠くなる気がした。

狭い空間にふたりの息が満ちるまで、時間がかかった。タイルの冷気が足首の上へ上がる。湿りの乾ききっていない匂い。昼に使われた石鹸がタイルの目地に薄く残っていた。窓がなく、月光はほとんどない。クロエが壁を探って灯をごく低く点けると、互いの輪郭だけがやっと浮かんた。目と唇、前垂れの白い線。灯は弱すぎて色をきちんと見せず、代わりに影を長く伸ばした。ジュリアンの影が壁に小さく張り、クロエの影はそれより長く鋭かった。

ジュリアンが便器の前に立つ。本来の目的はそれだった。ところがクロエは出ない。出るつもりもなさそうだった。彼女は背中その後ろに立ち、しばらく動かない。その沈黙が長かった。ジュリアンは振り返れないまま、手を空中に上げて下ろした。袖を捲るか。ただ用を足すか。彼女が立っているかぎり、体が言うことを聞かない。さっき聞いた音で、すでに硬くなった状態では、平凡な用さえ容

易ではない。気恥ずかしさが消える前に、クロエの息が肩越しに届いた。背骨を伝って温みが降りてくる感覚。シャツの布が薄く、その温みが骨の線に沿ってはつきりした。

「おひとりにしておくには……状態が素直すぎますわ。用より、先に鎮めないと。」

言葉で止める隙がなかった。指が先に腰のあたりへ触れる。ジュリアンの体が固まった。彼は手首を掴もうか迷った。掴む力が入らない。クロエの指先は急がない。釦をひとつ外し、しばらく止まり、ジッパーを下ろしていく金属の音をふたりに聞いた。その音がタイルの壁に短く弾ける。下水のほうで水滴がひとつ落ちる音と重なった。冷たい空気が肌に触れると、ジュリアンの腰が反射的に縮んだ。羞恥と欲望がいったんに喉を絞る。どちらが先か分ける暇もなく、タイルの冷気がふくらはぎを伝って上がり、正気を留めてくれた。ジッパーが下まで開いたあとも、クロエの指先はすぐには握らない。冷たい空気が露出した肌に先に坐ると、彼女は手の甲でその冷えだけを覆った。覆う仕草が昼の仕えに似ていて、ジュリアンはタイルの目地を目で数えた。

やがて柔らかい掌が包んだ。

すでに硬くなったそれを確かめたクロエの息が細くなる。驚くふりと、本物の驚きのあいだ。指が形を測るようにゆっくり巻き、力を少し抜き、また締めた。掌の肉が温かい。ジュリアンは壁のタイルを掴んだ。そこが冷たい。掌の熱の隣で、その冷たさが骨まで食い込んだ。彼は目を閉じて開き直した。閉じれば感覚が大きくなり、開ければクロエの横顔が淡く見える。

「わあ……。」

言葉はそれだけ。その次に来たのは動きだった。

上へ、下へ。最初は遅すぎて、耐えるほうが難しかった。掌が根元まで降り、先端が冷たい空気の中へしばらく現れ、また温かく包んで上がる。摩擦の熱が肌と肌のあいだから起き、下腹の真ん中へ集まった。ジュリアンの奥歯が噛み合う。吐息を飲み込むせいで顎が固くなり、唾が喉で粘く固まる気がした。タイルの冷気がふくらはぎを掴んでいるのに、手の中の熱だけが大きくなる。

クロエは速度を一定に置かない。何度か遅く撫で、急に二、三度速く擦り、また遅くなる。探りなのか、戯れなのか、見分けがつかない。ジュリアンの腿の内側がその変化に合わせて微かに痙攣した。かかとがタイルから浮いて降り直すたび、湿りの残る床が滑るように足裏を掴む。

「クロエ……こうされると……。」

言葉が途切れた。途切れた場所に息だけが残る。

「しーっ。」

唇が耳元へ近づいた。囁きが皮膚に振動として残る。唇の温度が耳輪を撫でた。ジュリアンはその温度のせいで、肩がもう一度縮むのを知った。

「声を出されると困ります。執事長はお休みでも……この家の廊下は、音がよく広がりますから。」

その一言で、扉の外の屋敷が再び浮かんた。眠ったアルフレッド。ひとり残されたビビアン。二階の父。四階の空いた廊下。隠さねば、という考えで背が冷えるのに、下半身はそれより遅れて、より張って締まった。理解が追いつく前に息が先に乱れた。彼は口を閉じる。閉じた唇のあいだからも息が漏れた。

クロエの親指がゆっくり動き、いちばん敏感な線を擦った。一度。二度。三度目は力を少し足した。ジュリアンの背が壁に付く。タイルの冷気が背骨を伝っ

てうなじまで上がるあいだ、前の掌の熱はより濃くなった。前は熱く、後ろは冷たい。二つの温度が肋骨で出会い、息の拍子を散らした。頭の中にビビアンの昼の笑いがしばらく掠め、クロエの香水に消された。

「若様……息だけしてください。私、勝手にやりますから。」

その言葉が昼の仕えの文をそのまま借りていた。だからより奇妙だった。皿を運んでいた声と同じ人間が、いまこういう手を使っている。ジュリアンはその繋がりを切りたかった。切れなかった。

時間がどれほど流れたか、分らない。

手が動き続ける。ときどき止まる。止まるたび、ジュリアンの体が待ちに応じた。そのあいだの空虚が、動きより深く残る。クロエはその反応を見ているようだった。低い灯の下で彼女の瞳が光る。面白がる目。その下に、慎む目。

「変だ……。」

ジュリアンの声が割れた。

「小便と……違う……。」

「分かっています。」

クロエの声がより低くなった。優しい。その優しさが息より先に来た。彼女は手を止めないまま、ジュリアンの横顔を見上げた。その視線が長く留まる。

「我慢しなくていいんです。初夜ですもの。」

手の速度が乗った。探りではなく、終わりへ向かうリズム。ジュリアンは知っていた。知りながら止められない。反対の手で口を塞いだ。塞がなければタイ

ルの壁に音が刻まれる。掌の中で息が湿く熱くなり、腿の筋が短く痙攣した。つま先がタイルの上の湿りを搔いて滑る。

扉隙間の吐息、スープの湯気の上のビビ안의笑い、歓迎の食卓のクロエの微笑がいっぺんに重なって碎けた。碎けた場所に感覚だけが残る。手の圧力。親指の摩擦。香水と石鹸と、自分の汗の混ざった匂い。

限界は予告なしに崩れた。こらえていた熱が専属の指のあいだから荒く噴き、短い吐息が掌の隙間から漏れた。クロエの手はその瞬間にも止まらない。盆を支える手のように、何度か、ゆっくり、絞るように。ジュリアンの腰が前へ出て巻き、膝が解けた。額を壁に預けると、汗がタイルに点々と付く。雫が流れ落ちて冷たく冷え、鼻先に残った香水だけが濃くなった。膝が内側へ折れると、クロエが掌で彼の腿の脇を支えた。倒れないための支え。支えているあいだ、指のあいだの熱はまだ冷えていない。

クロエは膝をついたまま—いつついたのか記憶さえ薄い—片方の手だけ上げて、彼の口を軽く塞いだ。性急さというより、護ろうとする仕草に近い。掌に残った温みの上へ、唇を押す手の温みが重なって残り、体がどこにあるか、しばらく迷った。塞ぐ手の力が弱く、息が指のあいだから漏れる。クロエはその湿りを拭かず、親指で下唇だけ押して、音が扉隙間へ出ないようにした。

「いい子……よくできました。」

ふたりの息がタイルの壁に当たって散るまで、時間がかかった。

ジュリアンは壁だけを見た。羞恥が先に来て安堵が続き、どちらの顔も上げられない。脈がタイルの壁に鳴るようだった。タイルの上の足裏が滑るほど、汗が出ていた。

それだけで終わると思った。

クロエは動かない。手を下げないまま、ジュリアンの状態が鎮まるのを待った。そのあいだの沈黙が、妙なほど長い。水滴がどこかで一洗面台か、壁の隙間か――一度落ちた。その音が部屋をごく小さく鳴らした。ジュリアンは息を整えようとした。整える前に、また別の息が不規則になる。敏感になった肌が掌に触れているだけでも痛い。良い痛みか、ただ過剰な刺激か、区別しにくい。

「まだ……残っていますわ。」

クロエが囁いた。確認というより、宣言に近い。

ジュリアンが首を振ろうとしたところで、彼女が頭を下げた。唇が先に触れる。手とはまったく違う感覚。濡れて、温かく、圧力が深い。先端が舌に掠めた瞬間、ジュリアンの腰が耐えきれず後ろへ反った。敏感すぎて。クロエは退かない。むしろ片手で彼の腿を固定し、もう片方の手で根元を包んだまま、ゆっくり口をより開いた。敏感すぎる先端を一度に飲み込まれず、唇の内側だけで縁を包んだ。包んだまま吐く息が肌に短く鳴った。

「そこは……あまり……。」

言葉にならない。ジュリアンの指が空中で巻いて、クロエの肩に触れた。押そうとして止まった。押す力が入らない。掴む力が先に入った。肩の布が指のあいだで皺になった。

舌がゆっくり動く。円を描くように、ときには下から上へ。深くなる時喉の締めりが先端へ伝わり、浅くなる時は唇の縁だけを包み込む。その緩急が手より残酷だった。唾が途切れる瞬間ごとに冷たい空気が滲んで腰を縮ませ、また濡れた熱が覆えば膝が解けた。ジュリアンは見下ろしかけて視線を天井へ上げた

。見れば終わりそうで。見なくても、唾の音と、鼻から漏れる息と、前垂れが床で擦れる音が漏れなく入ってきた。下水のほうの水滴が一度落ちるたび、心臓がその拍子に合わせて跳ねる。水滴と水滴のあいだの沈黙で、クロエの鼻先が下腹に掠めた。掠めるたび腹筋が縮み、彼女はその縮みが過ぎてから、首をより下げた。

「クロエ……もう……だめだ……。」

答えの代わりに振動が伝わる。喉の震えが肌へ入った。ジュリアンのつま先が巻く。反対の手がタイルを搔いた。爪が短く滑る音がした。

二度目が押し寄せたとき、ジュリアンは知った。止められない、ということ。彼はクロエの肩を掴んだ手をより強く握り、すまなくて力を抜いた。抜いても体はすでに終わりへ傾いていた。タイルの灯の縁がしばらく滲み、部屋の中の水滴の音だけが遠ざかった。快が先だったか羞恥が先だったか、今度は分ける気さえ起きない。体が先に終わっていて、頭が遅れて追いついた。息が短く割れて出る。喉へ飲み込まれる熱と、口元に残った香水。クロエがかすかに咳き込むように息を整える音。その咳のせいで、肩を掴んだ手に残っていた力が全部抜けた。さきほどの熱が喉を過ぎるあいだ、クロエの眉が短く寄った。

その音がことさら人間らしく聞こえて、ジュリアンの胸が締まった。

クロエが口を離し、ゆっくり立ち上がった。

息を整える音がふたつ。彼女は袖で口元を拭かない。代わりに低く点けた灯の下で親指で唇を拭い、その手を水で濯いだ。水の落ちる音が短く、何度か鳴った。ジュリアンはまだズボンをきちんと上げられないまま立っていた。脚に力がない。彼は洗面台の縁を掴み、やっと均衡を取った。

クロエが近づく。終わったあとなのに、仕草は仕えへ戻っていた。釦を留め、皺を払い、ジッパーを上げてくれる。丁寧だった。その丁寧さがかえってより見知らなかった。ジュリアンはその手を見てから、視線を外した。外しても香水は残る。

「ふう……秘密は、私が預かります。」

声は再び柔らかくなっていた。昼のクロエに近い調子。しかし目はまだ昼の焦点へ寄っていない。目尻に熱が残っていた。ジュリアンはその熱を見た。見ても、名を付けられなかった。

「昼は、何事もなかったように。若様も……そうしてください。」

ジュリアンはやっと頷いた。言葉がうまく出ない。クロエが掛け金を上げる前に、彼が短く訊いた。喉からやっと出た一音。

「……なぜ。」

クロエが止まる。取っ手に乗せた手がしばらく空中に留まった。彼女は首を傾げる。迷うふりか、本当に選んでいる最中か。低い灯が彼女の睫毛の影を頬に長く描いた。

「専属ですから。」

それで終わりではなかった。扉が開く直前、より低い声が耳元に残った。ほとんど息に近い言葉。

「それに……若様が盗み聞きしていらした、あの夜が、私には少し、羨ましかった、というか。」

扉が開いた。

廊下へ出た空気は冷たかった。

その冷たさが、汗の冷めたうなじに先に触れた。

クロエは先に階段のほうへ歩き、振り返って指を唇に立てた。しーっ。戯れのように。約束のように。

足音が遠ざかり、香水だけが残る。その匂いが消えるにも時間がかかった。ジュリアンはその場に長く立っていた。心臓が鎮まらない。タイルの冷気が足裏に、手の温みが手首に残り、どちらが本物か迷った。

彼は洗面台に水を出して顔を濡らした。水が顎を伝って流れる。鏡の中の自分の目が、昼より暗く見えた。彼は水をもう一度かけ、袖で顔を拭いた。布に湿りが残る。取るに足りない痕跡だった。それでも今日はその痕跡さえ重かった。

四階へ上がる階段は、降りるときより長かった。

欄干を掴む掌にまだ力が入っている。足音が大きくならないよう慎む癖が、いまは別の理由で戻ってきた。部屋の扉を開けて入りながら、彼は掛け金にしばらく手を当て、そのままにした。掛ける理由が見つからなかったのか、掛けたくなかったのかは、自分でも分からない。彼はベッドの縁に坐り込んだ。顔を擦った。香水が襟に残っている。息を吸うたび、クロエがまた来た。眠れるだろうか。分からない、と思った。それでも目を閉じないわけにはいかなかった。

明日は昼が来る。

昼は何事もなかったように、屋敷が回らねばならない。ビビアンが笑い、ルナが不器用で、父が気怠く、クロエが完璧な仕えをするだろう。

その完璧な仕えが、いまは昼の仮面としても読めた。

月明かりがカーテンのあいだから再び細く入ってきた。

ジュリアンはその光を見てから、ごく小さく呟いた。

『屋敷は……思ったより、深い。』

初日の夜は、そのときになって、タイルの冷気の中へ沈み始めていた。

(第 2 章 終)

第3章 日課の始まる朝

朝は、音より先に来た。

カーテンの隙間から入った光が布団の縁を白く染め、その上を埃がごく遅く漂っている。ジュリアンが目を開けたとき、天井は昨夜と同じ天井だった。斜めに打たれた釘の影。隅のひび。木目の流れる向きまでそのまま。ところが体が覚えている温度は違った。布団の中の空気は微温く、うなじには寝汗らしいものが薄く残っている。彼はしばらく動かなかった。体を移せば思考がついてきそうである。目だけ瞬いた。閉じるたび、埃の軌跡がしばらく途切れ、また続いた。

香水が残っていた。

ごく薄い。鼻を寄せなければ分からないほど。ところが一度気づくと、襟と枕と指先からいっぺんに上がってきた。掛かった便所。タイルの冷氣。掌の熱。唇の温度。掛け金が溝へ入るとき鳴った金属音。昨夜残した約束ひとつが、瞼を開けたとたん、先に席を占めた。昼には印が残ってはならない、ということ。ジュリアンは掌を見下ろした。爪の下も、指紋の溝もきれいだ。きれいすぎて、かえっておかしい。腰はまだ昨夜の重みを持っているのに、掌だけ何事も知らないふりをしていた。

思考はそこで途切れた。夢ならいい、という思いと、夢でなくてよかった、という思いが同じ場所でぶつかる。彼は天井を見てから、ゆっくり体を起こした

。腰に重い疲れが残る。旅の疲れか、夜の疲れか、区別しにくい。足裏が床に触れると、木の冷気が上がってきた。昨夜と同じ感覚。短く息を吐いて、窓辺へ歩いた。

カーテンを一掌だけ開けると、庭の秋が目にも痛いほど入ってきた。草の葉に結んだ露が光り、遠く生垣の向こうでは朝霧がまだ引き切っていない。どこかで鳥の声が短く二度鳴った。屋敷がすでに起きている印。ジュリアンはガラスに指先を当てた。冷たかった。その冷たさが頭を少し澄ませた。ごくわずかに、だけ。

ノックが三度鳴った。

間隔が正確だ。急がず、逃しもしない間隔。ジュリアンは喉を整え、声を昼の高さへ合わせてから答えた。

「どうぞ。」

扉が開き、アルフレッドが入ってきた。黒いベストの皺が朝日に光る。手には薄い紙が一枚。顔は平穩だった。落ち着いているぶん、ジュリアンの肋骨のあいだが先に締まった。夜のことを知る気配はない。知るはずがないと分かりながらも、喉が乾いた。彼は口角を下げて昼の顔を合わせようとした。肩もいっしょに下ろそうとしたが、寝汗の冷めた場所だけが涼しかった。

「おはようございます、若様。よくお休みになれましたか。」

「……まあまあだ。」

まあまあ。それ以上話す隙を与えない語。アルフレッドが短く頷く。それ以上は訊かない。問いを引いた礼儀が、今日は特にありがたかった。

「結構でございます。休暇中の基本の日課を短く申し上げます。お坐りになっても構いません。」

ジュリアンがベッドの縁に坐ると、アルフレッドが室内の小さな卓の上へ紙を広げた。字は端正だ。インクの滲んでいない、習慣的な端正さ。午前の食事。素養の時間。午後は屋敷の仕事への参加。台所・掃除・書斎の整理。文字が端正に続いていた。ジュリアンはその一覧を見下ろし、指で縁だけを撫でた。紙が少しざらつく。端に一度折った跡が残っている。アルフレッドが懷に入れて歩いていた場所らしい。

「明日は家庭教師の方が到着されます。今日は勉強より、屋敷のリズムに体を合わせなされたほうがよろしいかと。」

「台所からやります。」

言葉が思ったより早く出た。頭の中で選んだ答えでもあり、体が先に拾った答えでもあった。アルフレッドが眉をごくわずかに上げる。驚きというより、予想していた気配に近い。口元に笑いはない。目尻だけ少し解けた。

「そう仰ると思っておりました。以前から台所がお好きでしたから。」

「……覚えていらっしゃるんですね。」

「覚えることが多いのです。若様がご在宅のときは、特に。」

アルフレッドの声は低く澄んでいる。非難でも称賛でもない、予定表と同じ温度。ジュリアンはその淡さに息が一度解け、解けた息がすぐ羞恥へ変わるのを知った。何の罪もない人間の前で、罪を犯した人間のように紙の角を撫でていた。指先がわずかに震える。止めようと紙をより強く押すと、縁が小さく皺になった。アルフレッドはその皺を見ないふりをした。

「食事のあと、降ります。」

「支度をお手伝いいたします。クロエには伝えてあります。」

その名にジュリアンの指が止まった。ごく短く。紙の皺の上で。アルフレッドは見ていないようで、あるいは見たふりをしないようで、紙を畳んで卓の角に置き、一步退いた。靴の踵が床に軽く触れる音。彼は扉を開ける前に、もう一度頭を下げた。

「遅れずに降りてくだされば結構です。ご主人様は……いつものように、遅くなさいます。」

「はい。」

扉の閉まる音が柔らかかった。部屋に残ったのは折った予定表と、埃の漂う光だけ。ジュリアンはしばらく坐っていた。立つ前に、予定表の折れた角をまた広げてみた。「台所」という文字がことさらはっきり見えた。

しばらくして、またノックが来た。

今度は三度ではない。二度、少し軽い間隔。ジュリアンは息を吸い、最後まで吐いてから答えた。息が途中で引っかかった。また吐いてから、ようやく声が出た。

「……どうぞ。」

クロエが洗面の水と服を持って入ってきた。

盆の縁が陽に光る。水面はほとんど揺れない。彼女が敷居を跨ぐ仕方は昨夜と違った。足音がはっきりし、姿勢が正しく、視線が仕事の順に合っている。カーテンを開ける手。水を卓に下ろす手。服を揃えて掛ける手。動作はいつもの通り。似すぎていて、昨夜が急に遠くなる気がした。

ところが香水が先に来た。

昼の仕えではほとんど漂わなかったその香りが、今日は襟に付いた筆触のように部屋へ滲んでいた。嗅いだ瞬間、耳朵が熱を持つ。ジュリアンは視線を洗面の水に固定した。水面は静かで、静かな水面が顔を上げる口実を消してくれた。

「よくお休みになれましたか、若様。」

「……よく眠った。」

嘘だった。いや、嘘かどうか曖昧だ。眠りはした。眠りの質だけが違っただけ。寝返り回数。夢の温度。未明に一度目を開けて閉じたこと。クロエはその答えをありのまま受けた。追及しない。洗面の温度を手の甲で確かめ、手巾を広げて置く。仕草がゆっくり、正確だった。静脈の薄い線が水に濡れた光の下でしばらく見えた。

「お水は温かうございます。顔からどうぞ。」

ジュリアンが近づき、水をすくって顔へ上げた。温みが目元と頬を包む。雫が顎を伝って鎖骨のほうへ降りた。冷たくないで体は縮まない。代わりに心が縮んだ。クロエが静かに手巾を差し出す。指が掠めそうになった。掠めなかった。掠めそうになったその間隔が、肌により長く残った。ジュリアンは顔を拭いながら鏡を見ない。手巾の肌理が頬にざらつき、新しく洗った匂いが鼻を満たした。きれいな匂いほど、昨夜のタイルの冷気がはっきりした。

クロエが服を取る。シャツの皺を窓辺の光にかざし、一度払い、ベストの釦をひとつずつ確かめた。専属の朝。何百回としてきた動作。ところが今日に限って、その動作のあいだが長い。ジュリアンが腕を入れると、クロエが袖を引き上げ、肩の線を合わせ、しばらく止まる。止まりは短い。短くて口実が立てにくい

。指先が布の上に留まる時間が、いつもの呼吸ひとつ分、長い。ジュリアンはその止まりを知った。クロエも知っただろう。どちらも言わない。

肩に合わせられたベストが席を占める。クロエが後ろから襟を直した。息の音がうなじの近くでしばらく低くなり、すぐ遠ざかった。ジュリアンの背がわずかに固まる。クロエの手が離れた。音はなかったが、離れた感触は確かだった。

「今日は台所、と伺いました。」

「うん。」

「無理はなさらないでください。お手を怪我されますと……私が困りますから。」

終わりがわずかに笑っていた。唇だけ。目は昼の礼法へ戻っている。「困る。」の後ろに仕えと秘密が重なって聞こえた。ジュリアンはどちらなのか訊かない。訊いた瞬間、昼が割れそうで。彼は釦を自分で留めようとした。指が不器用だった。二番目の釦で穴がずれた。クロエが一步近づき、彼の手を避けたまま釦だけ直した。指先が布だけを触る。布の向こうで心臓が跳ねるようだったが、それは錯覚かもしれない。ジュリアンは心臓が自分のものだとだけ信じたかった。窓の隙間から入った秋の風が濡れた頬を撫でると、息が一度絡まった。

「昼は……。」

ジュリアンが口を開いて閉じた。言葉が完成しない。喉に語が引っかかっていた。クロエが待つ。急かさず、そのまま待って。盆を持った手が動かない。その待ちが長くて、部屋の埃が再び見え始めた。ジュリアンは結局、視線を窓の外へ転じた。庭。露。秋。露はもう少し減っていた。

「……何事もなかったように。」

彼がやっと続けて言った。自分の声がいつものより小さかった。

クロエの動きがごくしばらく止まる。息が一度引っかかったのか、襟の布が微かに揺れた。そしてまた、平穩に続く。彼女はベストの最後の皺を払い、ごく小さく頷いた。礼儀正しい会釈だったが、目だけはいつものと違った。

「はい。私、いいメイドでいますから。」

声は低い。部屋の外まで漏れないほど。その低さの中に昨夜の「しーっ」が重なって聞こえた。廊下は音がよく広がりますから。ジュリアンは下唇を噛んだ。歯が当たった場所が沁みる。沁みる味が舌に広がると、複雑に絡んだ言葉がしばらく止まった。

クロエが盆を整えた。使った洗面の水を入れた盥を再び載せ、手巾を畳んで手首に掛けた。扉のほうへ退く直前、視線がジュリアンの目に触れた。ごく短く。笑いではない。確認に近い。約束が有効だ、という確認。ジュリアンが頷くと、クロエはやっと扉を開けた。取っ手の回る音が昨夜より柔らかかった。

「食堂でお待ちしております、若様。」

扉が閉まった。

香水がごく薄く残っていた。

予定表の折れた角が、卓の上で陽を受けている。埃の一点がその上をゆっくり過ぎた。

ジュリアンはしばらくその場に立っていた。

指でベストの釦を触った。クロエが直した釦。その手触りが残っているようでもあり、残っていないようでもあった。彼は窓辺に手を置き、外を見た。屋敷が動いている。どこかで皿の音が聞こえ、下の階から低い話し声が短く上がって

きた。ビビアンの声のようでもあり、ルナの明るい抑揚のようでもあった。正確な出所を指す前に音が収まった。代わりに足音がいくつか廊下を掠めた。屋敷の朝はそうして、重ならない音たちで満たされていった。

昼が来た。毎日来ていた光が、今日は肩の上に先に坐った。ジュリアンは予定表を取って懐へ入れた。紙がズボンの布に擦れて小さく鳴る。取っ手を掴む前に掌を見た。汗がわずかに滲んでいる。彼は掌をズボンに一度擦ってから、扉を開けた。

廊下の空気が冷たかった。

四階の朝は静かで、階段を降りるほど屋敷の温みが濃くなる。ジュリアンは欄干を掴み、一段ずつ降りた。掌に蠟が滑って残る。発音を殺す慎みが、今日は別の重さで戻ってきた。昨夜と同じ階段。違う光。違う約束。三階を過ぎるとき石鹸の香りが薄くあり、二階の応接室の扉は閉まっていた。屋敷が完全に目覚めた音はまだではない。代わりに窓の外、露を結んだ草が陽に光る、音のない輝きだけがガラスに掛かっていた。

一階へ近づくほど、パンを焼く匂いが濃くなった。

バターと小麦粉と、どこか少し焦げた縁の匂い。腹がわずかに空いた。空いている感覚が妙にありがたかった。胃はすでにパンを欲していて、頭だけが掛け金の金属音に残っていた。

食堂の扉が半分開いていた。

中からコーヒーの香りが漏れてくる。カップが皿に触れる音が一度した。ジュリアンは扉の前で息を一度整え、昼の顔を選んで扉を押した。蝶番が低く鳴る

。その鳴りの向こうに、まだ静かな食卓と、窓辺に置かれた陽が先に入ってきた。
。

扉の向こうでカップが皿に触れる音が、また短くした。朝の日課が、その音の後ろに坐って待っていた。

(第 3 章 終)